The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 学童の近視と性格特性 : 自動屈折検査とY-Gテストによる検討 |
| Author(s) | 有田, 和弘 |
| Citation | 大阪大学, 1985, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/34652 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【2】

| | |
|---|---|
| 氏名・（本籍） | 有田和弘（ありたかずひろ） |
| 学位の種類 | 医学博士 |
| 学位記番号 | 第 6796 号 |
| 学位授与の日付 | 昭和60年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 医学研究科 社会系専攻<br>学位規則第5条第1項該当 |
| 学位論文題目 | **学童の近視と性格特性**<br>**ー自動屈折検査とY－Gテストによる検討ー** |
| 論文審査委員 | （主査）<br>教授 朝倉新太郎<br>（副査）<br>教授 後藤 稠 教授 眞鍋 禮三 |

## 論文内容の要旨

（目　的）

本邦における裸眼視力1.0未満の学童の比率は，イギリスなどの欧米諸国と比較してもかなり高く，視力異常は学校保健上，重要な問題の一つとなっている。

ところが従来からなされてきた学校現場における近視調査の多くは裸眼視力を判定基準とするものが多く，低学年にあっては遠視児童をも近視として扱っている場合が少なくない。またものを見るという働きは，単に眼の機械的な機能によるだけでなく、「認識」という高次の中枢機能との協同作業であるにもかかわらず、近視をはじめとする視力異常に関しては，心理的因子との関連性を疫学的に分析した研究はほとんどない。

そこで本研究では，最近国内で開発されたオートレフラクター（自動屈折検査器）を用いて学童の眼屈折度に関する集団検診を行ない，近視のみでなく，正視・遠視をも含めた屈折状態と，心理的因子としての性格との関連性について明らかにすることを目的とした。

（対象ならびに方法）

大阪市内にある小学校4校の4年生を対象とし，昭和57年度および58年度の両年にわたり，計1134人（男574人：女560人）について調査・分析を行なった。屈折度の測定にはその中の1109人に対し，オートレフラクター（Canon AUTO REF R－1）による他覚的自動屈折検査を実施した。視力異常の分類法としては，次の2点を考慮した。1）性格との関連性を検討する上で従来の片眼別分類では不適切であることから，両眼を併せて判定する個人別分類を行なった。2）屈折度以外に裸眼視力の結果を併用することで，眼心身症や屈折度だけからは正常として取り扱われる恐れのある種々の眼疾患が正視群の

中に混入されることを除いた。以上の1）と 2)より全児童を①近視群（両眼とも－0.5 D以上かつ裸眼視力0.5以下：49人）②正視群（両眼とも±0.5 D以内かつ裸眼視力1.0以上：462人）③遠視群（両眼とも＋0.5 D以上：164人）および④その他（左右で判定の異なる場合など：434人）の計4群に分類した。さらに性格特性を数量化する目的で，全児童に対して矢田部－ギルフォード性格検査（Y－Gテスト）を実施した。

（成　　績）

1）児童を対象に実施した屈折集団検診の結果，裸眼視力0.3以下においても，遠視眼（＋0.5 D以上）の占める比率は22.3％と高率に認められた。

2）Y－Gテスト12因子の平均点から，男女とも近視群では他の3群（正視群・遠視群・その他の群）に比べて，情緒不安定および社会的不適応に関するD（抑鬱性）・C（回帰性傾向）・I（劣等感）・N（神経質）・O（主観的）・Co（非協調的）の各因子における得点が低い傾向にあった。これらのうち分散分析により有意差の認められた因子は，男子の場合，D・C・Iの3因子，また女子では，C・I・N・Oの4因子であった。

3）広い意味で情緒安定・不安定の指標となるD・C・I・N・Oの5因子の合計得点を比較すると，男女とも近視群では他の3群よりも有意に低値を示すことが，分散分析により男子（$P < 0.01$），女子（$P < 0.05$）の危険率で認められた。

4）Y－Gプロフィール5類型の比率から，男女とも近視群では他の3群に比べて，C類型（情緒安定消極型）およびD類型（情緒安定積極型）の占める比率が有意に高く（$\chi^2$検定：$P < 0.05$），両方を合わせて男子では60.0％，女子では55.1％であった。逆にB類型（情緒不安定積極型）およびE類型（情緒不安定消極型）の比率は低く，両方を合わせた比率では男子20.0％，女子37.9％であった。

（総　　括）

1）自動屈折検査の結果から，裸眼視力のみに基づく生活指導では，遠視の学童をも近視の学童と同一視してしまう危険性があり，屈折状態の明確な把握が必要と思われる。

2）Y－Gテスト12因子の検討から，近視の学童は他の学童と比較して，情緒安定性および社会適応性がより高い傾向にあることが認められた。またY－Gプロフィール5類型の比較からも，近視群では情緒安定型に属するC類型およびD類型の占める比率の高いことが認められた。以上の結果から，近視の学童は「長時間の近業に，より適応したパーソナリティ」を有している者の多いことが明らかにされた。

## 論文の審査結果の要旨

本論文は学童の近視について，これまで検討がほとんどなされていなかった性格因子との関連性を明らかにせんとしたものである。そのため小学4年生児童を対象に，自動屈折検査器を用いた集団検診を行ない，その結果に従い，学童を近視群・正視群・遠視群およびその他の合計4群に分類し，Y－Gテ

ストを用いて各群における性格特性の相違を検討した。その結果，近視群では他の3群と比較して，情緒安定性ならびに社会適応性がより高い傾向にあることを統計的に明らかにした。

以上の成績は，近視の成因に関して新しい重要な知見を加えたものであり，医学博士の学位を授与するに値するものと認める。